



京都大学フィールド科学教育研究センター
センター長・教授

しばた しょうぞう
柴田 昌三

京都府生まれ
京都大学大学院農学研究科修了
日本緑化工学会副会長
日本造園学会理事
International Consortium of Landscape
and Ecological Engineering 事務局長
World Bamboo Organization 理事

「里山イニシアティブを世界の基盤的な思想へ」

現在我が国では、竹に対するまなざしがようやく変化しつつあるようです。今から十年前、全国で拡大しつつあるモウソウチク林に対するバッシングが熾烈に行われていた当時すでに稀少価値化していた竹研究者の一人であった私のもとには、いかに竹を絶やすか、といった問い合わせが連日のように寄せられました。当時書いた文献(ネコとタケ、岩波書店、2001)に、竹のせいにするのではなく、そうしてしまった日本人の生活の変化を反省すべきと書いた記憶があります。当時は竹林も含めた里山そのものに対する言及が十分でなかったこともあって、私の意見はほとんど受け入れてもらえなかった気がします。しかし、現在では、「憎むのではなく、愛しましょう」と述べた私の考えは、少しずつ受け入れられ、昨今の自然エネルギー源の開発という風潮にも助けられて、貴重な資源として竹も認められつつあり、そのための技術開発も急

速に進みつつあることは、個人的には非常に嬉しく思います。一方、竹は、太古以来、日本を代表する植物の一つとして認識されてきました。「松竹梅」、「竹林の七賢人」など、中国から導入された思想にも裏打ちされて、日本人は竹を日本を代表する植物として今も認識しており、日本らしい庭園ということになると、掌を返したように竹を植えます。その象徴的な空間として首相官邸の中庭に植えられたモウソウチクと外構にふんだんに植えられているクロチクがあげられます。首相官邸を訪問する海外のVIPたちは日本を代表する造園空間として竹を中心とした庭を見せられるのです。このことは、日本外交の視点からも大きな意味を持っている、と考えるべきでしょう。

国から地方自治体にいたる行政は以上のようなことを忘れてはならないと思います。日本人は竹をコントロールする術を失いつつあります。しかし、象徴的にはまだ日本のシンボリック植物の一つとして竹は厳然と存在しているのです。マツ枯れで日本からマツが消え、タケが外来種であるモウソウチクの拡大のみに注目されて外来雑草のように扱われる中で、日本人は自らの国を代表する植物をどう捉えようとしているのでしょうか。私は日本人としてのシンパシーを感じることでできる植物すら失いつつある日本に危機感を覚えていきます。

私は、仕事から開発途上国を中心に飛び回る生活を送っています。センター長を務める京都大学フィールド科学教育研究センターでは、森里海連環学を最重要かつ不可欠の学問分野として世に問う毎日です。このような移動そのものが私の趣味になりつつある気もします。竹林も含めた里山的な空間とそれに支えられた生活を世界中に求める日々は今の私の趣味そのものかもしれません。これらの経験を通して、ここ数年、日本から世界に発信されている里山イニシアティブを世界の基盤的な思想として広めて行ければ、と考えています。